

製造業に三現主義

製造の業界では開発の過程全体を理解することが大切だ。三現主義とは色々な製造業の企業で使われている原則であり、ホンダやトヨタも普段の業務にこの原則を盛り込んでいる。三現主義は主要な問題を明らかにしておりし、この問題を直し、製造手順を学ぶのに役立つものである。

三現主義とは三つの「現」から成り立っている考え方のことだ。第一の「現」は、現場を意味する。現場とは管理職が問題の発生した現場に行かなければいけないということだ。つまり、現場に行くことで、プロセスラインを観察し、どのように問題が発生したか理解することができる。管理職は直に工程を見て問題を理解する。例えば、トヨタは豊田佐吉以来、三現主義を使い始めた。トヨタは製造現場に行くことを重要視している。現場に足を運ばなければ、製品を理解することはできない。

第二の「現」は現物のことであり、機械や工具、原材料、半製品、完成品などの現物を実際に見ることを重視するという意味だ。アプローチによって正確なリアルタイムデータを手に入れることができる。このような現物を自分の目で見ることによって管理職は生産やサービスの品質を確認することができる。ホンダでは、「直接の経験が問題解決の知恵を生む」と言われている。いつも、新しいデザインのクレイモデルを作る。これはモデルと機能性を理解するために使用される。

三番目の「現」とは現実のことであり、従業員の意見を理解し、客観的な事実を把握することを意味する。管理職は従業員と話すことで、作業の手順が間違っている場合は直すことができるの理解することができる。また、従業員が仕事する現場の雰囲気を知ることもでき、それが業務の効率化を促す。管理職はデータを分析し、

調整を行うことができる。このように、管理職が現場を訪れることには多くの意味がある。車を製造する前に、日産は 3D モデリング・ソフトウェアでテストする。このデータがあれば、必要に部品が変わることができる。データを分析した後で実車でテストを行うことができる。

三現主義には多くのメリットがある。まず、管理職は実際の業務の流れを理解できる。管理職がプロセスを理解できれば、業務の流れは改善されてこれがより良い製品につながる。問題を減らし、時間とリソースの配分を改善することができる。第二に、管理職は問題が起こった際に迅速に対応することもできる。管理職が生産現場にいると、生産過程に問題があったり従業員が頼みを聞いてほしい場合にすぐ対処できる。問題解決のスピードが上がり問題が少なければ少ないほど、仕事の効率が上がるだろう。また、三現主義は継続的な改善を促進することができる。この原則を使うのは重要な問題の見落としを阻んでエラーやリスクを減らすことができる。

一方、三現主義にはデメリットもある。まず、三現主義を実践しようとするとき時間がかかる。管理職が現場に赴き、各部をチェックすることにより時間がより必要になり、多くの過程に遅れが出る可能性がある。管理職が緊急の問題よりも検査を優先する。そのため、意思決定が遅くなる。問題が多すぎると、緊急性の高い問題に対処するのに時間がかかりすぎるかもしれない。また、三現主義を実行することがマイクロマネジメントに繋がる可能性もある。従業員は常に質問されることで管理されているように感じ、モチベーションや自主性を低下させてしまうことがある。管理職は仕事をする代わりに監督することに時間をかけすぎる問題がある。

三現主義は日本文化をよく反映しており、それが日本のビジネスにおける三現主義の重要性につながっている。日本の文化では、商品の品質は完璧でなければならないと考える傾向がある。高品質を保つためには、製造過程におけるエラーやミスをなくすようにしなければならない。管理職の三現に基づく仕事は、このようなエラーやミスが起こらないようにすることだ。管理職は製造現場で何が起きているか常にして知っていなければならない。次のステップや業務について決定するおんができる。だからこそ、日本のビジネス文化が反映されているのだ。

三現主義は日本の製造業の文化には大切だ。三現は生産性を高めるために、良いルールだ。さまざまな製造業が三現主義を使っている。現場、現物、現実はワークフローを調整し、生産性を高めるのに役立つ。改善が必要な場合なら、三現主義を使うべきだ。